ララチェの城壁の実施案が成立する経緯

－フェリペ3世のスペインによるアフリカ北西部における軍事拠点作り (1)－

PROCESS OF THE PLANNING OF DEFENSIVE WALLS IN LARACHE

－Foundation of fortresses in the northwest coast of Africa

by Spain of Felipe III (1)－

高柳 伸一*

Shinichi TAKAYANAGI

This paper analyzes, for the first time, the whole process of the planning of the defensive walls realized in Larache, Morocco, the enclave Spain of Felipe III possessed in 1610, by referring the related documents in *Colección Aparici*. The final plan was based on the idea of Bautista Antonelli, one of the most important military engineers in that period. And this paper shows that the most important factor in that process was to make a project which can be constructed with low cost and two conditions observed in the original plan of Antonelli were not seen in the final plan. Antonelli modified his original plan according to the wish of the Court which was concerned about its cost. At that period, the Spanish government was trying to reduce the expenditure for military budget, including that of the fortification, in order to solve its financial problem. Therefore, we can regard the process of the planning of the fortification in Larache as a case that shows the general feature of Spanish fortification in the first quarter of the 17th century.

Keywords : Bautista Antonelli, Military engineer, Fortification, Spain, Larache, Felipe III

バウティスタ・アントネリ、工兵、要塞化、スペイン、ララチェ、フェリペ3世

1. はじめに

1-1. ララチェの城壁に関して

本稿は、フェリペ3世(在位1598-1621)の政府が軍事拠点¹⁾(plaza)を築くため領有した、アフリカ北西部に位置するララチェ²⁾(Larache)で建設された城壁を論じたものである(写真1、図1)。ララチェは、スペイン経済を支えていた新大陸との交易に大きな被害を与えていた私掠船の巢窟となっていた。交易路の安全と、同海域の制海権を高めるため、フェリペ3世の政府はララチェをモロッコ・アサード朝の王ムハンマド・エッ・シェイク2世(在位1608-13)と交渉の末1610年11月20日に領有した³⁾。スペイン政府は領有を強固にするため、軍隊を常駐させる軍事拠点の要塞化としてララチェに城壁を建設した。

スペインがララチェを領有した際、同地には既に村落(la villa de Larache)が形成されていた。また、1491年には村落を取り囲む城壁が、さらに、1580年前後には稜堡を備えるサンタ・マリア要塞(Castillo de Santa Maria)とサン・アントニオ要塞(Castillo de San Antonio)が建設されていた⁴⁾(図2)。そのため、同地は既に軍隊が滞在できる環境が不十分ながらも整っており、スペイン軍は当初それらの既存の環境に適応するかたちで駐屯していた⁵⁾。

スペインがララチェに建設した城壁は、駐屯地として活用していた村落を取り囲む形態で同地の防御力を高め、同時に新しい居住地を築くものであった。その城壁の実施案は、1610年12月から1615年

図1 アフリカ北西部におけるスペインの主な軍事拠点 作図著者

10月までの約5年間、宮廷と現地の間で議論が交わされた結果成立したもので、原案はイタリア出身の工兵、バウティスタ・アントネリ⁷⁾(Bautista Antonelli, ?-1615)によって作成された。アントネリは南米カリブ海周辺に位置するスペインの殖民都市の要塞化事業で大きな足跡を残している工兵である⁸⁾。また同じくイタリア出身のホアン・デ・メディシス⁹⁾(Juan de Médicis, 生没年不詳)もララチェの城壁の計画案の作成に関与している。

スペインは、ララチェに駐屯軍を滞在させ続けていたが、モロッコ国王ムライ・イスマイル(1672-1727)の軍勢によって同地を1689年に失っており、スペインがララチェを統治していた期間は79年となっている。なお、本稿で論じるララチェの城壁は1920年代の後半、都市拡張の計画に従い解体されている¹⁰⁾。

* 大同工業大学 非常勤講師・博士(工学)

Part-time Lecturer, Daido Institute of Technology, Dr. Eng.

写真1 1920年代中頃のララチェ
Fotografía de Larache 10420, Colección de García Figueras, Biblioteca Nacional de Madrid.

図2 ララチェの既存の村落と要塞およびアントネリイの2つの案を表した図⁵⁾
A. La villa de Larache 1. 1610年12月10日付けのアントネリイ案の城壁の輪郭
B. Castillo de Santa Maria 2. 1612年6月8日付けのアントネリイ案の城壁の輪郭
C. Castillo de San Antonio 3. 既存の城壁
D. medio baluarte 斜線部 高台(eminencia)

1-2. スペインが築いたその他のアフリカ北西部の軍事拠点

ララチェの他、フェリペ3世統治時代のスペインがアフリカ北西部に築いた軍事拠点として、別稿で論じるラ・マモラ(La Mamora)があった(図1)。ラ・マモラも私掠船対策として領有され、地政学的にはララチェと同一視できる拠点作りであったが、同地には新規の駐屯地として城塞が築かれた。その他スペインがアフリカ北西部に築いた軍事拠点として、領有期間が短く目立った要塞化が実施されなかったアルジェ(Alger)と小規模な拠点を除けば、メリジャ(Melilla)、マサルキビル(Mazalquivir)、オラン(Orán)、セウタ(Ceuta)がある¹¹⁾(図1)。これらの中で、ララチェと同じように、スペインが領有する前、既に村落または都市が形成されていた地点は、メリジャ、オラン、セウタである。これらの地点では、ララチェと同様に、スペイン軍は既存の環境に適応するかたちで駐屯しており、既存の城壁や建物は最大限に活用されていた。他方、マサルキビルは都市として発展していた地点ではなかったが、スペインが領有した時点で既に中世時代に築かれた城郭が存在していた。しかしながら、スペインは同地を領有した約55年後となる1564年頃から、マサルキビルの城郭を大幅に改築する工事を開始しており、17世紀初頭には同地は稜堡式築城術によって強固に要塞化されていた。従って、マサルキビルは上記した地点の中で、ラ・マモラと共に城塞を建設して築かれた拠点と言える。

1-3. 本研究の目的と構成

本稿は、スペインの要塞化事業に関連する公文書が収録されているコレクション・アパリシ¹²⁾(Colección Aparici)に基づき、ララチェで建設された城壁の実施案が成立する経緯を明らかにし、その成立の背景を宮廷の意向と工兵の活動から検討することを目的としている。本稿で扱う期間は、スペインが1610年11月20日にララチェを領有した後から、城壁の壘壁¹³⁾(terraplén)の建設工事が終了したと報告される1616年8月1日までとし、その後、継続されていた壘壁を石造の壁体で覆う建設工事は扱っていない。本稿はこの期間を大きく3つ

に区分している。最初は、アントネリイが現地で作成した複数の計画案がスペインの要塞化事業を統制していた宮廷の国防諮問院(Consejo de Guerra)で審議されていた期間である。この期間、宮廷はララチェを早急に要塞化する姿勢を見せていないが、ここでは、アントネリイが作成した一連の計画案の変遷と宮廷における議論の関連性が検討される。二つ目は、メデイシスがアントネリイ案とは大きく異なる1613年7月7日付けの対案を提出した後、宮廷において実施案を決定する議論が活発に行なわれた期間である。この期間、宮廷ではアントネリイ案とメデイシス案を比較するかたちでララチェの要塞化が審議されており、国王はアントネリイ案を実施することを決定している。最後は、アントネリイが国王の決定案を拒否した後、実際に建設された城壁の計画案をメデイシスと共同で作成し、その壘壁の建設工事が終了するまでの期間である。この実施案は実質的にはアントネリイ案となっているが、当初アントネリイが示していた案とは異なっており、その変更からも実施案が成立した背景を検討する。

本稿は上記したような区分に従って内容が構成されている。そして、それらの経緯の分析から、宮廷と、現地で活動していたアントネリイの双方にとって、ララチェに城壁を実現する際の最大の焦点は、低予算で建設可能な計画案を作成することであり、最終的に実施された案も、当初のアントネリイ案から理解できる3つの要塞化の前提条件のうち2つが放棄された形で成立したものであったことを示す。先行研究¹⁴⁾でも資金の問題でアントネリイの初期案が実現されなかったことが指摘されているが、これまでララチェがスペインに割譲された後から実施案が成立するまでの全体の経緯を明らかにしたうえで、実施案が成立した背景を検討した研究はなされていない。また本稿では、図面の分析と先行研究の成果から、スペイン軍がララチェで建設した兵舎や倉庫等の軍事施設の配置と、それらが建設された経緯も整理検討する。そして、アントネリイは当初軍隊の機動性も考慮した区画整備を、城壁の建設に伴い新しく築かれる居住地で実施する構想も示していたが、実際には各種施設の建設は城壁が建設される前から既存の環境に適応するかたちで開始されており、同工兵が計画していたような区画整備は必ずしも必要とされなかったと理解できることを示す。

ララチェとラ・マモラを同時に扱った本研究は、16世紀後半から17世紀初頭のスペインにおける要塞化事業と工兵の研究の一環として、フェリペ3世のスペインが領有したアフリカ北西部の軍事拠点で実施された要塞化の実情と工兵の活動を検討することを目的としている。本稿とラ・マモラを扱った別稿と合わせることで、拠点が築かれた要因は地政学的には同一視できるが、計画案が作られる際の基準や実施案が成立する経緯は双方で対照的になっていることが示される。

2. パウティスタ・アントネリイの計画案と宮廷の意向

2-1. アントネリイが送付した一連の計画案

1610年11月20日、ララチェがスペインに割譲された際、同地に遠征した艦船に乗船していたアントネリイは、少なくとも実施案が正式に決定される1615年10月23日まで現地に滞在し続けている。その期間、アントネリイはララチェで実施する要塞化の計画案を宮廷に送付し続けていた。そして、ホアン・デ・メデイシスが1613年7月7日に独自の対案を提出するまでの約2年半の期間、アントネリイが作成した計画案の中で内容を検討することが可能なものは4つになっている¹⁵⁾。それらの案で、アントネリイが独自に作成したのは3つで、残りのひとつはメ

ディシスとの共同案になっている。ここでは、先ず、アントネリが作成した一連の計画案の再現を試み、その変遷を検討する。

1610年12月10日付けの案

アントネリが作成した最初の案の日付は、ララチェがスペインに割譲された約1ヶ月後となる1610年12月10日になっている。アントネリが同案を説明した書簡¹⁶⁾と共に宮廷に送付された図面の有無は確認されていないが、その城壁の輪郭は、後に同工兵が作成した1612年3月15日付けの図面に点線で描かれている¹⁷⁾(図3)。

この最初の案は3つの条件を満たすことから成立していると理解できる(図2)。一つ目は、既存のサンタ・マリア要塞とサン・アントニオ要塞を稜堡を備えた城壁で連結することである。この配置によって、既存の村落を城壁で防御すると同時に、新しい居住地が築かれることになる。この2つの要塞の区間を城壁で連結する形態は、同工兵が作成した全ての案で共通しており、それはアントネリによるララチェ要塞化の基本構想と呼べるものになっている。二つ目はサンタ・マリア要塞を新しく築く稜堡の内部に収容する処置である。16世紀後半には既に三角形平面の要塞は、稜堡の角度が鋭角過ぎるため不適切だと認識されるようになっていたが¹⁸⁾、アントネリも上記書簡の中で同要塞の稜堡では十分な防御は達成できないと述べている¹⁹⁾。最初の案では、同要塞は、同じ箇所に建設される稜堡の内側に収められている。同時に新しく築く稜堡に対応した半稜堡(medio baluarte)が既存の城壁の東側に増設されている(図2)。三つ目は、サンタ・マリア要塞の南西方向に位置していた高台(eminencia)の保護である(図2)。この高台からララチェの拠点内部を見下ろすことができるため、来襲してくる敵軍が陣を張る場所になり得、同箇所から拠点内部が敵軍の放火に曝される事態も想定されていた²⁰⁾。最初の案では中央の稜堡を高台付近に配置し、敵対者が高台に近づけないようにしている。

1611年4月11-12日付けのメディシスとの共同案

アントネリが最初に作成した上記1610年12月10日の案は、国防諮問院の他、当時宮廷に滞在していたホアン・デ・メディシスによっても審査されている²¹⁾。その後メディシスはララチェに派遣され、同地でアントネリと共同で1611年4月11-12日付けの案を作成している²²⁾。同工兵の共同案を示す図面は存在していないが、アントネリの書簡²³⁾から、城壁の形態は1610年12月10日付けのアントネリ案に類似していたと判断できる。

1612年3月15日付けの案

図3 アントネリの1612年3月15日付けの計画案
Bautista Antonelli, Archivo General de Simancas, M. P. y D. XXV-62.

アントネリが描いた1612年3月15日付けの図面²⁴⁾は現存しているが、同案を説明した同工兵の書簡は確認されていないため、同案は図面のみからの解釈となる²⁵⁾(図3)。図3から読み取れるように、サン

タ・マリア要塞の箇所には新しい稜堡が配され、同要塞からサン・アントニオ要塞の間に2つの稜堡が描かれている。これらの稜堡の配置は、1610年12月10日付けの案と同じであるが、2つの要塞の間に配されている稜堡は、同案の図面に重ねて描かれている最初の案の稜堡より内側に移されている(図2、図3)。この変更から、この段階で三つ目の条件と説明した、拠点内部を見下ろすことができる高台付近に稜堡を配置し、同箇所に敵対者が接近できないようにする処置は、高台と稜堡の間に距離が生じているため、不十分になってしまったと言える。

1612年6月8日付けの案

1612年6月8日付けの案をアントネリ自身が説明した書簡²⁶⁾は現存しているが、同書簡と共に送付された図面は確認されていない。しかしながら、メディシスが描いた1613年7月7日付けの図面に同案に基づく城壁の輪郭が重ねて描かれており、その図面とアントネリの書簡を照合することで、1612年6月8日付けの案を再現することができる²⁷⁾(図2、図4)。同案における最大の変更点は、これまでの案で維持されてきた、二つ目の条件と説明したサンタ・マリア要塞を稜堡の内部に収める処置が断念されていることである。同案では、同要塞は新しい稜堡で覆われることなく、平野に面してあらわになっている。さらに同要塞の箇所に配置する稜堡に対応して増設されていた半稜堡も省かれている(図2)。また一つ目の条件であると説明した、2つの要塞の区間を城壁で連結する形態は維持されているが、サンタ・マリア要塞を活用する設計になっているため、城壁は直線的になっており、さらに個々の稜堡も縮小している。その結果、1612年3月15日付けの案で既に不十分になっていると指摘した、高台付近に稜堡を配置し、同箇所に敵対者が接近できないようにする三つ目の条件も、同案では高台と稜堡の距離がさらに開いているため、当初の案で見られた稜堡で直接高台を保護する考えは放棄されていると言える²⁸⁾。アントネリは上記書簡の中で、同案を建設費を抑えることを第一に考慮して作成したと記しているが、その城壁はこれまで見てきたどの案よりも簡素になっている。また、ここまで見てきた全ての計画案では、城壁は石造を前提に設計されていたと判断できるが²⁹⁾、同案を説明したアントネリの上記書簡には、建設費を抑えるため、城壁の建設材料には日干しレンガが採用されると説明されている。

以上のように、メディシスが1613年7月7日に独自案を提出するまで、アントネリが宮廷に送付した4つの案の変遷は、図面と書簡の分析から、城壁を簡素化したうえで、その位置を内側に徐々に移動し、全体の規模が縮小していると理解できる。最初の案で示されていた2つの要塞化の条件である、サンタ・マリア要塞を新しく築く稜堡に収容する処置と、高台の保護は、規模が最小になっていた1612年6月8日の案では共に断念されていた。また同案では建設費を抑えるため、建設材料も日干しレンガに変更されていた。しかしながら、一つ目の条件と説明した2つの要塞を城壁で連結する構想は全ての案で堅持されていた。

2-2. 宮廷における審議

アントネリが一つ目の条件を堅持したうえで、規模を縮小させた複数の計画案を作成したのは、それらの案を審議していた国防諮問院の意向に応じた結果であった。その意向とは、少ない資金で実現可能な計画案を作成するため、要塞化の規模は縮小すべきであるというものであった。この意向が最も具体的に説明されている記録は、規模が最大になっていた1610年12月10日の案に対する1611年1月

25日付けの審議録³⁰⁾となっている(図2)。この審議録には、駐屯軍の規模と建設費の2点から、計画案の規模を縮小する必要が説明されている。さらに二点目の建設費に関連して、当時のスペイン本国における要塞化事業の実情が参照されている。なお本稿2-3で論じるように、上記審議録で記されている規模縮小を求める宮廷の意向が指令として現地に通知されたのはメディシスとの1611年4月11-12日の共同案が宮廷で審議された後であったと判断できる³¹⁾。また上記審議録の日付以降も宮廷で規模縮小の必要性が検討されたと理解できる記録はあるが、内容を具体的に検討できるものは少ない³²⁾。

まず、一点目の駐屯軍に関して、諮問院では、アントネリが計画している城壁は過大であるため、戦闘の際、守備に就く兵士の数も、現在駐屯している兵数より相当数多く必要になると指摘されている³³⁾。二点目の建設費に関しては、アントネリ自身の試算では、城壁の建設費は130,000から140,000デュカド(ducado)になるとされていたが、諮問院では、同案に基づく城壁の建設には300,000デュカド以上の資金が必要になる可能性があると指摘されている。また同審議録には、スペイン本国のアラゴン(Aragón)地方とナバラ(Navarra)地方、そして、ペルピニャン(Perpiñán)とカディス(Cádiz)の都市を引用して、各々の地域や都市で資金難のため要塞化事業が停滞している実情が記されている。先行研究³⁴⁾に従えば、上記2つの地方で特に要塞化が必要とされた都市や上記の2都市では、国王が建設を決定した城塞や城壁の工事は1610年代前半には実際に停滞している。諮問院で他の地域の実情が参照されたことは、ララチェでも多くの資金が必要となる大規模な案を承認してしまえば、他の地域と同じように、資金不足でその建設工事が停滞し、結果的に同地の要塞化が遅れてしまうと宮廷側が懸念していたことを示している。以上のように整理できる1610年12月10日付けのアントネリ案に対する諮問会議の結果、フェリペ3世は、ララチェを要塞化することは承認しているが、規模と建設費は過度にならないようにする国王指令(Decreto)を出している³⁵⁾。

2-3. 宮廷の意向とアントネリ案の変遷の関係

前節で見た、1610年12月10日のアントネリ案に対する1611年1月25日付けの審議録で示されている宮廷の意向が、指令として現地に伝えられ、実際の計画案に反映されたのは、本稿2-1で見た案の中では、1612年3月15日の案が最初であったと判断できる³⁶⁾。宮廷の記録³⁷⁾には、アントネリが最初に作成した案と類似していたと判断できる、1611年4月11-12日付けのメディシスとの共同案に対して、規模を縮小するように国王が命じた後、アントネリが単独で異なる計画案を作成したと記されている。そして、それらの案のひとつが上記1612年3月15日の案であったと理解できる。その後、アントネリはさらに規模を縮小させた1612年6月8日付けの案も作成していたが、それら一連の案の変遷は、前節で論じた宮廷の意向に応じて同工兵が建設費の抑制を検討した経緯を示していると理解できる。

2-4. 工兵ヘロニモ・デ・ソトによるアントネリ案の修正

本稿2-1で検討したアントネリの計画案の中で、1612年3月15日と同年6月8日の2つの案に関しては、国防諮問院の指示によって、当時宮廷に滞在していた工兵、ヘロニモ・デ・ソト(Jerónimo de Soto, 1570?-1629)が審査している³⁸⁾。ソトはララチェを一度も訪れたことはなかったが、アントネリが送付した報告書と図面を基に、上記2つの案を比較するかたちで検討している(図2、図3)。そして、ソトは修正することを条件に、より小規模な1612年6月8日の案が適切であると諮

問院に報告している。ソトが加えた修正は、城壁を日干しレンガ造から石造に変更し、さらに、アントネリが設置しなかった稜堡側面の砲台室(casamata)と耳部(orejón)を加えることであった³⁹⁾。

3. アントネリ案とメディシス案に対する宮廷での審議と国王決定

3-1. ホアン・デ・メディシスが提示した対案

これまで見てきたように、アントネリは複数の案を宮廷に送付していたが、フェリペ3世が実施する案を正式に決定したのは、ララチェを領有してから約3年後となる1613年10月13日になっている⁴⁰⁾。その国王決定案は、アントネリによって拒否され、結果的に実施案とはならなかったが、そのように宮廷が決断を下すまで長期の時間を要した主な理由は、冒頭でも述べたように、ララチェは既に駐屯軍が滞在できる環境が不十分ながら整っていたことに加え、宮廷側が着実に要塞化を実施するためにも、計画案を慎重に審議していたためであった。そして、宮廷で実施案を決定する議論が活発になるのは、ホアン・デ・メディシスが独自に対案を提出した1613年7月以降となっている。

既に述べたように、メディシスは宮廷からララチェに赴き、1611年4月11-12日付けの計画案をアントネリと共同で宮廷に送付していた。その後、再度宮廷に戻ったメディシスは、上記共同案を提出してから約2年後となる1613年7月7日、一旦は同意したアントネリ案とは極めて異なる構想に基づいた独自案を国王に提出している。

図4 メディシスの1613年7月7日付けの計画案
Juan de Médis, Archivo General de Simancas, M. P. y D. IV-62.

メディシスが1613年7月7日付けの案を説明するため作図した図面は現存しており、その図と同工兵の意見書⁴¹⁾を照合することで同案は理解できる⁴²⁾(図4)。メディシスは自身の案を少ない資金でこれまで提出されたどの案よりもララチェの拠点を強固に要塞化するものと説明しており、同工兵も宮廷側が建設費を抑えた計画案を望んでいたことを十分に把握していたことが分かる。図4からも確認できるように、同案では、サン・アントニオ要塞は城壁の外側に留め、同要塞付近の防御は、掘削工事のみで資金が掛からない覆道⁴³⁾(estrada cubierta)や塹壕(trinchera)を巡らせて整備している。そして、限られた資金の大半を、当時既に最も理想的な要塞化の形態であると認識されていた正五角形の要塞⁴⁴⁾に則したかたちで配置する、稜堡と幕壁の建設に投入し、サンタ・マリア要塞の南西方向に位置する高台を直接稜堡で保護したうえで、既存の村落の周辺を重点的に要塞化する計画になっている。

3-2. フェリペ3世による決定とその理由

メディシスが上記独自案を提出した後、1613年7月29日と同年9月23日の2回にわたって国防諮問院の会議が開催され、メディシス案と、

ソトが修正した1612年6月8日付けのアントネリ案が比較される形式で審議されている⁴⁵⁾(図2、図4)。本稿2-1で見たようにアントネリは複数の案を宮廷に送付していたが、この時点で既に、宮廷では規模が最小になっていた上記案のみを審議の対象にしている。

上記した2回の諮問会議では、各諮問員の意見は分かれており、諮問院内部で統一した見解をまとめることはできていない。しかしながら、メディシスが対案を提出してから3度目となる1613年10月13日に開催された諮問会議が終了した直後、フェリペ3世はソトが修正したアントネリ案の実施を決定した国王指令を出している⁴⁶⁾。これは、本研究で確認できた限り⁴⁷⁾、1610年11月にララチェを領有した後、初めて宮廷が正式に建設を承認した計画案となっている。

上記国王指令の中で説明されている決定理由は、アントネリ案の方がメディシス案より工期が短く、さらに建設費も少なくなると記されているのみで、両案で異なっていた城壁の形態に関する評価はなされていない。先ず工期に関しては国王指令には具体的な根拠は記されていないが、諮問院の記録⁴⁸⁾には、メディシス案ではサンタ・マリア要塞およびその他多くの施設を解体する必要があるため、工事の量はアントネリ案の方が少なくなると言及されている。また、建設費に関しては、国王指令には、メディシス案が80,000から90,000デュカド、アントネリ案が70,000から80,000デュカドに収まると記されており⁴⁹⁾、10,000デュカド分であるが、アントネリ案の方が建設費を抑制できる案として評価されていた。これら2つの案の試算額は、アントネリが最初に提示した1610年12月10日の計画案の試算額と比べると、双方共に大幅に額が小さくなっており、建設費の試算額から見ても、この時点で審議されていた計画案は既に当初の案より規模が縮小したものになっていることが分かる。以上のように国王が実施案を決定する際の評価基準は建設費と工期になっているが、この基準からも、本稿2-2で既に検討した宮廷の意向を改めて理解することができる。

4. 実施されたララチェの城壁の計画案

4-1. アントネリによる国王決定案の拒否とメディシスとの共同案

国王が決定した計画案に従って城壁の建設工事を開始する指令の通知書は、国王の署名もなされている建設指示書(instrucción)と共にララチェに送付された⁵⁰⁾。しかしながらアントネリは同指示書が発行されてから約7ヵ月後となる1615年4月12日の書簡⁵¹⁾で、その決定案を実施しなかったことを宮廷に通知している。アントネリは同書簡の中で決定案は本来自身が日干しレンガ造を前提として設計したものであるため石造の設計としては不適切であると指摘したうえで、もし石造で建設するのであれば、サンタ・マリア要塞を稜堡の内部に収める設計に変更すべきであると進言している。さらに上記指示書で定められている石造の壁体の寸法は過度であり、不必要に資金を浪費する設計になっているとも指摘している⁵²⁾。そして同案を実施することになれば、自身の名誉と良心を損なうことになるかと述べている。

アントネリが上記書簡を送付した時期と重なる1615年4月28日⁵³⁾、ラ・マモラでの活動を終えたメディシスが再度ララチェを訪れている。メディシスも、アントネリと同様、国王の決定案を不適切だと判断し、その結果、両工兵は現地で再度調査を行った後、1615年5月5日付けの共同案⁵⁴⁾を作成し、それを宮廷に送付している。

4-2. 実施された計画案

アントネリとメディシスが送付した上記共同案は、1615年6月4日と

同年8月26日の両日、諮問院で審議されているが、これまでと同様に同院内部では一致した結論を得ることはできていない⁵⁵⁾。しかしながら、フェリペ3世は、1615年10月23日、新たに送付された共同案を実施することを定めた国王決議書(Real Cédula)を発行している⁵⁶⁾。この国王が新たに決定した案に基づきララチェで城壁が建設された。

国王の決定に従って、ララチェで城壁の建設が開始され、その翌年の工事の終了が、国王決議書の発行から約9ヵ月後となる1616年8月1日付けの書簡⁵⁷⁾で宮廷に報告されている。その後、壁を石材で覆う工事が1620年頃まで継続されていたと推測されており⁵⁸⁾、ララチェの城壁は石造の城壁として完成している(写真1)。上記書簡には同年7月22日付けの図面も添えられており、その図からも最終的に実施された両工兵の共同案を確認することができる⁵⁹⁾(図5)。

図5 1616年8月1日付けの書簡と共に送付された同年7月22日付けの図面 Francisco Ugarte de Acosta, Archivo General de Simancas, M. P. y D. XLIV-44.

実際に建設された城壁は、既存の2つの要塞を連結した形態で、これはアントネリの構想に基づいたものである。このことから、メディシスはアントネリ案とは極めて異なる独自案を提出していたが、最終的にはアントネリの構想に同意したことが分かる。城壁は、アントネリが国王の決定案を拒否した理由のひとつに挙げていたサンタ・マリア要塞を新しく築く稜堡の内部に収容する形態とはなっていないため、半稜堡が増設されていた東側の既存の城壁もそのままの状態になっている。また同要塞の南西に位置する高台と稜堡の間も離れている。これらのことから、実施案も1612年6月8日付けの案と同じように、本来、アントネリが望んでいた2つの条件を断念して、建設費の抑制を優先させたものであったと言える。なお両工兵が宮廷側に示した実施案の建設費は本研究で用いた資料には記されていなかった。しかしながら、既に述べたようにアントネリが1612年6月8日付けの案に基づく国王決定案を拒否した理由のひとつが、不必要に資金を浪費する過度な壁体寸法であったということに加え、1615年5月5日付けの共同案に対するララチェの指揮官が作成した書簡内容⁶⁰⁾から、宮廷側に示された建設費の試算額は、ソトが修正した後の1612年6月8日付けのアントネリ案の試算額より少なかったと想像することができる。

5. スペイン軍が建設した施設とアントネリの区画設計に関して

ララチェでは城壁の建設に伴い新しい居住지가築かれた。アントネリが作成した1612年3月15日付けの図面では、既存の城壁に隣接して設けられている練兵場(plaza de armas)から城壁に向けて道路が伸びており、新しい居住地は整備された形で描かれている(図3)。このことから、同工兵は、軍隊の機動性も考慮した区画整備を新しい居住地で実施する構想を有していたことが分かる⁶¹⁾。しかしながら、79年間のスペインによるララチェの統治時代、アントネリが示してい

たような区画整備は実施されることはなかった。ここでは、まず、アントネリの上記図面や1616年7月22日付けの図5に加え、先行研究⁶²⁾も参照することで、スペイン軍が各種の軍事施設を建設していった経緯を整理検討する。そして、アントネリが示していたような区画整備が行われなかった要因を考察する。

まず、アントネリが作成した図3から、最初に建設された施設は、兵舎(cuartel)、軍需倉庫(almacén de municiones)、病院(hospital)、馬小屋(caballeriza)であったことが分かる(図6)。それらは馬小屋を除いて全て旧城壁内に配置されている。このことから、最初の施設は旧城壁によって既に保護されていた村落から建設が開始されたと言える。同時に、これらの施設が建設されていた時期は城壁の計画案も議論されていたが、最初の施設は、当時建設が計画されていた城壁とは無関係に、既存の環境に適応するかたちで随時建設されていたことも理解できる。なお16世紀に建設されたメスキータは教会堂(iglesia)に転用され、また上記図3には描かれていないが、同じく16世紀に建設された宮殿(alcázar)も総督館(casa del gobernador)として活用されていたと考えられている⁶³⁾。その後、建設された施設は、塁壁の工事が終了した際に作成された図5で確認することができる。同図には旧城壁の外側の2箇所に兵舎が新たに描かれており、さらに婦人用宿舎(casas de las mujeres)も同じく旧城壁の外側に描かれている。また新しい城壁の入り口に門番所(cuerpo de guardia)が描かれている(図6)。これらは、新しい居住地に配置された初めての施設となっている。なお図5では旧城壁内部は整備された形で描かれているが、実際には同図のような区画整備は行われていない。その後、スペインがララチェを失う1689年まで、新しい居住地に軍需倉庫、礼拝堂(ermita)、弾薬倉庫(almacén de la pólvora)、士官用宿舎(casa de sargento)が建設されている(図6)。その一方で、城壁が完成した後も、旧城壁内部に兵站部(viviendas y oficinas de la administración)が建設されており、既存の村落は依然としてスペイン軍の重要な居住地であり続けていたことが理解できる。

図6 スペイン軍が建設した施設の建物を表した図 作図著者

1612年3月15日付けの 図面の中の施設(6は除く)	1616年7月22日付けの 図面の中の施設	1616年から1688年に 建設された施設
1. Cuartel	7. Cuartel	10. Almacén
2. Almacén de municiones	8. Casas de las mujeres	11. Ermita
3. Hospital	9. Cuerpo de guardia	12. Almacén de la pólvora
4. Caballeriza		13. Casa de sargento
5. Convento		14. Viviendas y oficinas de la administración
6. Casa del gobernador		

以上のように、スペイン軍は既存の環境に適応するかたちで施設の建設を開始しており、城壁が完成する前、既に既存の村落には必要な多くの施設が建設されていた。既に述べたように、アントネリは、軍隊の機動性も考慮したうえで、新しい居住地を整備する構想を示していた。しかしながら、実際には城壁が完成した後に建設された施設の数、軍隊の機動性を損なうほど多くなっておらず、その結果、アントネリが示していたような区画整備は必ずしも必要とされなかった

と考えることができる。同時に、点在している施設の配置から、城壁が建設された後のララチェは駐屯軍の規模⁶⁴⁾に対して十分な面積を有していたことも分かる。当初スペイン政府はララチェを港湾都市として発展させるため、非戦闘員の住民を入植させる意図も示していた⁶⁵⁾。アントネリが図3の図面を作成した際、政府が意図していたように入植も念頭においていたのかは、同工兵が入植に関する言及はしていないため判断することはできなかったが、実際はスペイン統治時代のララチェでは入植はほとんどなされておらず、また、際立った民間施設も建設されていない。このように、ララチェが純粋な軍事拠点であり続けたことも、アントネリが示していたような区画整備が実施されなかった要因として指摘できる。

6. まとめ

実質的にはアントネリ案に従って建設されたララチェの城壁は、同工兵の基本構想であった既存の2つの要塞を連結する形態は維持されていたが、当初の案から理解できた2つの要塞化の前提条件は放棄されており、規模が縮小していた。このように実施案が成立したのは、ララチェの要塞化を確実に実施するためにも、建設費を抑えた計画案を要求していた宮廷の意向が作用した結果であった。その意向は、共に建設費の試算額が参照されていた、アントネリが最初に作成した計画案に対する審議と、結果的には実施案とはならなかったが国王が一旦は実施すべき案としてアントネリ案を採用した理由に明確に現れていた。またアントネリは複数の計画案を宮廷に送付していたが、その変遷は、上記したような宮廷の意向に応じて同工兵が建設費を抑制することを検討した経緯を表しているものと理解できた。

フェリペ3世のスペイン政府に関する研究書に従えば、同政府の特徴として、危機的な状況に陥っていた財政を立て直すため、要塞化事業を含む軍事費の削減を企てた政策が指摘されている⁶⁶⁾。本研究では、同政策とララチェの要塞化の関連を直接示した記録を確認することができなかった。しかしながら、本稿2-2で見たように、宮廷における審議では、スペイン本国の要塞化事業が資金難で停滞している実情も参照されていた。このことから、ララチェの城壁の実施案が成立する経緯そのものが、投じる資金を削減せざるを得なかった17世紀初頭のスペインの要塞化事業をよく表しているものであると言える⁶⁷⁾。

当初、アントネリは軍隊の機動性も考慮した区画整備を、新しい居住地で実施する構想も示していた。しかしながら、スペイン軍は既存の環境に適応するかたちで各種の施設の建設を開始しており、城壁が完成した後に建設された施設は軍隊の機動性を妨げるほど多くなっておらず、そのため、アントネリが示していたような区画整備は必ずしも必要とされなかったと考えることができた。

なお本稿1-2で説明した、その他のアフリカ北西部のスペインの軍事拠点において、16世紀から17世紀にかけて、ララチェと同様に、城壁を建設することによって新しい居住地が築かれた地点はメリジャのみとなっている(図1、図7)。スペイン軍が占拠した際、メリジャはほぼ半壊していた状況で、16世紀の前半、既存の村落に隣接する岬に城壁を建設して新しい居住地が築かれている⁶⁸⁾。その居住地には、ララチェとは異なり、各種施設は密集して建設されていたが、18世紀以前に形成された区画は不規則になっており、ララチェと同様、区画整備は行われることなく、施設は建設されている。従って、スペインがララチェを領有していた17世紀末までの時代、アフリカ北西部における

同国の軍事拠点の中で、城壁の建設に伴い新たに築かれた居住地が規則的に整備された地点はなかったと言える。

図7 メリジャで築かれた新しい居住地 1800年⁶⁸⁾

注

- 1) plazaは常時軍隊が駐屯している、防衛・戦略上重要な飛び領土を意味する。
- 2) ララシェはスペイン語に従った表記で、フランス語ではララシュとなる。本研究で論じた時代のスペインではアララシェ(Alarache)と呼ばれていた。本稿で定義しているアラカ北西部の範囲はイベリア半島とほぼ同じ経度の地点に従っている。なおアルジェより東側にはチュニス(Tunis, スペイン領1535-69, 1573-74)やトリポリ(Tripoli, スペイン領1510-30)などの拠点群があったが、イスラ・デ・タバールカ(Isla de Tabarka, スペイン領1535-1741)を除き、全てフェルベ3世の統治時代には領有権を失っている。またラ・マモラの西側にはサンタ・クルス・デ・マル・ペケニャ(Sta. Cruz de Mar Pequeña, スペイン領1478-1524)があった。
- 3) ララシェの割譲の経緯に関しては次の文献で詳しく述べられている。Tomás García Figueras y Carlos Rodríguez Jouliá Saint-Cyr, “Larache, Datos para su Historia en el Siglo XVII”, C.S.I.C., Madrid, 1973, p.25-26, p.83-88, p.113-114.
- 4) ララシェの旧城壁が建設されたのはワタース朝(1471-1554)の時代となる。サン・アントニオ要塞とサンタ・マリア要塞は、モロッコ国王アブメッド・ル・マンズール(1578-1603)の指令によって建設が開始された。両要塞の建設経緯は不明な点が多いが、双方とも西欧で発達した稜堡式築城術に基づいて建設されているため、1578年のアルカセル・キビール(Alcázarquivir)の戦いで捕虜にしたポルトガル人が主導して建設されたと推測されている。Guillermo Duclos Bautista y Pedro Campos Jara, “Larache, Evolución Urbana”, Junta de Andalucía, Sevilla, 2001, p.31-32.
- 5) アントネリの2つの案の城壁の輪郭は同工兵が作成した図3とメディスが描いた図4の双方で示されている輪郭に従って著者が作図した。また高台(斜線部)は上記メディスの図面に従って描いた。
- 6) ララシェの村落は本来小規模な100軒前後の家屋から構成されていた。アントネリは下記の書簡で現在滞在可能な家屋は50軒で、他は崩壊していると記している。Archivo General Militar de Madrid(以下A.G.M.M.), Colección Aparici(以下C.A.), Tomo XXXI, número(以下N.) 3979, fol.21, Copia de descripción y fortificación de Alarache por Bautista Antonelli, 10 de diciembre de 1610.
- 7) 同工兵のイタリア語表記はバッティスタ・アントネリ(Battista Antonelli)となる。
- 8) アントネリはイングランドなどの私掠船によるカリブ海周辺のスペイン領都市に対する略奪行為が深刻になった後となる1581年から1604年までの期間、同地域に4回遠征しており、カルタヘナ・デ・インディアス(Cartagena de Indias)、プエルトリコ(Puerto Rico)、サント・ドミンゴ(Santo Domingo)、ベラクルス(Veracruz)、ハバナ(Habana)、ポルトベロ(Portobelo)、パナマ(Panama)等における要塞化に従事している。アントネリは稜堡式築城術が十分に発達した16世紀後半以降、南米のスペイン領で活動した初めての有能な工兵と考えられている。同工兵の南米における活動に関しては次の文献がある。Diego Angulo Iniguez, “Bautista Antonelli. Las Fortificaciones Americanas del siglo XVI”, Discurso de Ingreso a la Real Academia de la Historia, Madrid, 1942.
- 9) メディスの経歴は未だ不明な点が多い。現在、同工兵の研究はマドリード通信教育大学大学院に在籍するFrancisco Javier Bueno Soto氏によって進められている。
- 10) 前掲書Guillermo Duclos Bautista y Pedro Campos Jara(2001), p.77.
- 11) その他のアラカ北西部のスペインの軍事拠点に関しては次の文献を主に参照した。Mikel de Epalza y Juan Bta. Vilar, “Planos y Mapas Hispánicos de Argelia siglos XVI-XVIII”, Instituto Hispano-Arabe de Cultura, Madrid, 1988. Juan Bta. Vilar, “Mapas, Planos y Fortificaciones Hispánicas de Marruecos (s.XVI-XX)”, Ministerio de Asuntos Exteriores, Madrid, 1992. Antonio Bravo Nieto, “Ingenieros Militares en Melilla, Teoría y Práctica de Fortificación durante la Edad Moderna Siglos XVI-XVIII”, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Melilla, 1991. José Antonio Ruiz Oliva, “Fortificaciones Militares de Ceuta: Siglos XVI al XVIII”, Tesis Doctoral, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Madrid, 1998. Alicia Cámara, “Orán, Modelo de Fortificación en la Edad Moderna”, inédita, 2001. Beatriz Alonso Acero, “Orán-Mazalquivir, 1589-1639: Una Sociedad Española en la Frontera de Berbería”, C.S.I.C., Madrid, 2000. オランとセウタの間に小規模な拠点として、ホネイン(Honein, スペイン領1491-1534)、ペニョン・デ・ベレス・デ・ラ・ゴマザ(Peñon de Velez de la Goma, スペイン領1508-22, 1564)、カサザ(Cazaza, スペイン領1505-22)があった。
- 12) コレクション・アパリシとはシマンカス公文書館(Archivo General de Simancas, Valladolid)に保管されている、スペイン政府で国防を担当していた国防諮問院で扱われていた関係史料が収められている「Guerra Antigua」の中で、要塞化事業および工兵に関する史料・図面を、ホセ・アパリシ・イ・ガルシア(José Aparici y García)が1844年から1856年までの12年間、書き写した資料集である。同コレクションはInstituto de Historia y Cultura Militarに属するArchivo General Militar de Madridに保管されており、計

- 20.450通の書簡が収録されている58巻からなる。1945年には同コレクションの目録も作成されている。
- 13) 星壁とは土を盛って築かれる土手のことである。
 - 14) スペイン軍が建設した城壁に関する最も詳細な研究は都市史としてララシェを扱った下記の学位論文となっている。同論文でもコレクション・アパリシが使用されており、現存している各々の図面が分析されている。同論文でもアントネリの初期案は純粋に築城術の観点から作成されたが、財政上の問題から部分的に拒否されてしまったと指摘されている。その財政の問題を例示するため同論文では宮廷において建設資金を調達するためスペイン・アンダルシア地方に援助を申し込む方法が議論されたことが言及されているが、本研究では同地方から実際に援助がなされたのかは確認できなかった。しかし城壁に関する同論文の主な内容は各々の計画案の分析となっているため、実施案が成立した経緯の分析は限定的となっている。そのため同論文では、本稿で論じている宮廷における審議内容や、建設費の試算額に関連した議論、アントネリが国王決定案を拒否した後からメディスとの共同案が最終的に宮廷で承認された経緯は扱われていない。Abdelatif Elboudjaj, “Larache: Estudios de Historia y Arqueología Urbana y Monumental(título original: La ville de Larache(al-Ara is): Etude d'histoire et d'archéologie urbaine et monumentale)”, Tesis Doctoral, Universidad de Rabat(Institut National des Sciences de l'Archéologie et du Patrimoine), inédita, 1998, p.107-117. ララシェを論じたその他の先行研究として前掲書Guillermo Duclos Bautista y Pedro Campos Jaraがあるが、城壁の実施案が成立した経緯は論じられていない。
 - 15) メディスが独自案を提示する前となる1611年3月28日付けの書簡で、アントネリはこれまでララシェの城壁の図面を3枚または4枚作成したと記しているが、それらの図面は確認されておらず、また、全ての案は既存の要塞を連結する形態の城壁であったという以外、内容を十分に検討できる説明もなされていない。また宮廷の審議録にも、本文で議論した以外のアントネリの案が審議された記録は見当たらない。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3986, fol.44-47, Copia de relación del sitio de Alarache para su fortificación por Bautista Antonelli, 28 de marzo de 1611.
 - 16) 注6と同じ資料のfol.20-24.
 - 17) 先行研究でも図3に最初のアントネリ案が描かれており、同案は都市計画と要塞化の双方において最も完全な同工兵の案であると指摘されている。また同案の稜堡や幕壁そして堀の位置も分析されている。前掲書Abdelatif Elboudjaj, p.109.
 - 18) 三角形平面の要塞は防御力が乏しいことはマモラの城壁を設計したクリストバル・デ・ロハス(Cristóbal de Rojas, 1555?-1614)が著した築城書(Teoría y Práctica de Fortificación, Madrid, 1598, fol.41)でも記されている。ロハスは同書で三角形と四角形に基づく要塞は鋭角過ぎるため、必要にせまられた場合を除いて決してそれらの図形の要塞は作らないと述べている。先行研究に従えば、上記した三角形と四角形に関する指摘は、1564年イタリアで出版された築城書(Gerolamo Maggi y Jacomo Gastriotto, “Della fortificazione delle città”, Venecia)で既に述べられている。Angel Isac M. Carvajal, “La ciudad militar en dos tratados de fortificación del siglo XVI”, la España Medieval, número 6, 1985, p.58.
 - 19) アントネリはサンタ・マリア要塞の稜堡は鋭角過ぎるためマスケット銃による銃弾(mosquetazos)によってさえも亀裂が入ってしまうと述べて、同要塞の防御力が乏しいことを誇張気味に説明している。また基礎工事なしに地表に建設され、隅部を除いて石造ではなく日干レンガ造となっている同要塞は防御施設としては考慮に値しないとも述べている。注6と同じ資料のfol.21, 22. なおサンタ・マリア要塞を稜堡で覆わない形態となっていた、Vtが修正した1612年6月8日付けのアントネリ案の実施を定めた1614年9月13日付けの建設指示書には、同要塞には補強工事が施されると説明されており、稜堡内部に収容しない場合、同要塞には補強が必要であったと認識されていたことが理解できる。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4034, fol.177, Copia de la instrucción y orden del Rey sobre la fortificación de la villa de Alarache, 13 de septiembre de 1614.
 - 20) 本研究で用いた資料にはアントネリが高台の保護に関して具体的に説明した書簡は収録されていない。しかしアントネリの最初の案と同じように高台付近に稜堡を配置している1613年7月7日付けの案を作成したメディスは、ヘロニモ・デ・リツが修正した1612年6月8日付けのアントネリ案を実施案と定めた1613年10月13日付けの国王決定に対する反論書の中で、国王決定案では、高台を外側に留めたため、稜堡と幕壁の上部(plazas altas, 兵士が守備に就く場所)そして兵舎が敵軍の放火に曝されることになるかと記している。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4023, fol.134, Copia de observaciones de D. Juan de Médicis, de 15 de diciembre, sobre la fortificación resuelta en Alarache y parecer del Duque de Concentania de 18 de diciembre, 1613.
 - 21) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3983, fol.36-39, Copia de parecer de D. Juan de Médicis sobre la fortificación de Alarache, 4 de febrero de 1611.
 - 22) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3990, fol.56-59, Copia de papel de D. Juan de Médicis, de 12 de abril de 1611.
 - 23) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3988, fol.50, Copia de carta de Bautista Antonelli, 11 de abril de 1611. アントネリは1611年4月11-12日付けのメディスとの共同案を説明している上記書簡で、共同共同案の図面は、1610年12月10日付けのもの、メディスが提案した稜堡の工法やその他の事柄を除いて、一致していると述べている。下記のメディスの書簡でも、同工兵の見解の相違として稜堡の工法が言及されている。メディスはアントネリが計画していた稜堡内部の星壁は縮小すべきであると主張しており、アントネリもその主張に同意している。しかしメディスはララシェから宮廷に戻った後、アントネリとの共同案とは異なる案を再度提出すると述べており、ララシェにおける同工兵の同意は一時的なものであったと理解できる。上記共同案は先行研究では言及されていない。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3992, fol.64-67, Copia de parecer de Juan de Médicis sobre la fortificación de Alarache, 19 de mayo de 1611.
 - 24) 1612年3月15日付けのアントネリの図面はララシェの駐屯軍の指揮官ガスパール・バルデス(Gaspar de Valdés)の書簡と共に宮廷に送付されたものであった。宮廷の記録にはバルデスの1612年5月4日付けの書簡と共に、これまでより稜堡を縮小させた案が送付されたと記されている。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4006, fol.93-94, Copia de relación de lo tratado acerca de la fortificación de Alarache, año de 1613.

25) 前掲書 Abdelatif Elboudjay の p.109-110 でも、既存の城壁と要塞との関係から、アントネリが作成した図面で確認できる稜堡と幕壁の配置が分析されている。

26) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3999, fol.81-82, Copia de carta de Bautista Antonelli, 8 de junio de 1612.

27) メデイスが1613年7月7日に作成した図4にはアントネリが最後に提出した計画案と注解されている城壁の輪郭が描かれている。同日付の前、確認されているアントネリの計画案は1612年6月8日付けの案のみとなっているため、メデイスがアントネリ案として示した輪郭線が上記日付のアントネリ案の城壁であると判断できる。前掲書 Abdelatif Elboudjay の p.111 でも1612年6月8日付けのアントネリ案は1612年3月15日の案より簡素化されており、メデイスが作成した図4にその輪郭が描かれていることが説明されている。また同書でもアントネリが建設費を抑えるため日干しレンガを採用したことが説明されている。

28) 注20で述べたように、メデイスは同案に基づく城壁の配置では拠点内部が敵軍の放火に曝される考えを示している。

29) 1610年12月10日付けの案をアントネリ自身が説明している書簡には、城壁の建設に使用できる石材が、堀から採取できることが説明されており、このことから、同案は石造を前提に設計されたと推測できる。注6と同じ資料の fol.23. またメデイスとの共同案に関しては、注23で述べたように、最初の案と類似していたと理解できるため、同案も石造を前提としていたと思われる。1612年3月15日付けの図面(図3)には、日干しレンガ造を前提として設計した際にアントネリが省略した砲台室と耳部が描かれているため、同案も石造を前提としていたと思われる。

30) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3980, fol.25-32, Copia de consulta de Consejo y decreto de Felipe III de 25 de enero de 1611.

31) 本研究で用いた資料からでは、規模縮小の指令が現地に直ちに通知されなかった要因を具体的に検討することはできなかった。

32) 1611年1月25日付けの審議の他、規模縮小が具体的に検討されたと確認できる審議はアントネリとメデイスの1611年4月11-12日付けの共同案に対する審議となっている。同共同案を直接審議した宮廷の記録や審議に応じた国王指令は、本研究で用いた資料には収録されていない。しかしその審議内容は、実施案となった1615年5月5日付けの共同案が審議された同年6月4日に開催された諮問会議の記録に収録されている、それまでのララチェの要塞化に関する議論の経過をまとめた諮問員の発言の中に記されている。その内容は、注33で説明しているように、兵数から具体的に規模縮小を求めるものとなっている。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4039, fol.187, Copia de consulta del Consejo de 4 de junio de 1615.

33) 1611年1月25日の記録には具体的な兵数は記されていないが、後に作成された宮廷の記録には、最初のアントネリ案と類似していたと判断できる、メデイスとの1611年4月11-12日付けの共同案に対して、同案では5,000人もの駐屯軍が必要になる要塞化の規模であり、ララチェの要塞化は1,200人の兵士で防御できる計画案に変更すべきであると国王が命じたことが記されている。注32と同じ資料の fol.187. なお実際の駐屯軍の規模に関して、1611年1月25日付けの審議録に、現在の駐屯軍は800人の歩兵、幾らかの騎兵、多くの役人と記されている。その後のララチェの駐屯軍は幾らか減少しており、1611年には700人、1681年には640人となっている。しかし1681年にラ・マモラが攻略された後、ララチェの駐屯軍が補強されており、同地がモロッコ軍に攻略される前年となる1688年には1,000人の歩兵に加え、指揮官や役人、その他の非戦闘員を含めると合計で1,311人が滞在していた。前掲書 Tomás García Figueras y Carlos Rodríguez Joulí, p.253, p.269-270.

34) 諮問院で言及されているアラゴン、ナバラの両地方で特に要塞化がなされた都市はハカ(Jaca)、パンプロナ(Pamplona)、フエンテラビア(Fuenterrabia)、サン・セバスティアン(San Sebastián)である。それらの4都市とベルビニョンとカディスに関しては以下を参照した。Concepción Porras Gil, “La Organización Defensiva Española en los Siglos XVI-XVII desde el Río Eo hasta el Valle de Arán”, Universidad de Valladolid, Valladolid, 1995. Pablo de la Fuente de Pablo, “La Ciudad como Problema Militar: Perpiñán y los Ingenieros de la Monarquía Española(ss. XVI-XVII)”, Tesis Doctoral, Universidad Nacional de Educación a Distancia, Madrid, 1995. Víctor Fernández Cano, “Las Defensas de Cádiz en la Edad Moderna”, C.S.I.C., Sevilla, 1973.

35) Decretoは「国王指令」と訳した。なお資料には同指令が具体的に誰に出されたのかは記されていない。注30と同じ資料の fol.32. なお本稿2-3 で論じているように同国王指令は現地には直ちに伝えられなかったと判断できる。

36) 1611年2月7日に開催された諮問会議でメデイスをララチェに派遣する目的が協議されているが、それらは現地の防御施設や地形そして建設材料等を調査し適切な計画案(planta)を作成するという内容で、本稿2-2で検討した1611年1月25日に開催された諮問会議と、同会議に応じた国王指令で指摘されていた規模縮小は言及されていない。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.3984, fol.41, Copia de consulta de Consejo de 7 de febrero de 1611. また注15で言及した1611年3月28日付けの書簡で、アントネリは、それまで作成した3枚または4枚描いた図面の要塞化は、1610年12月10日付けの案と判断できる。既に国王に送付した計画案と費用の面でおおよそ同じであると説明しており、少なくとも同日付の時点では宮廷からアントネリに対して規模縮小の指令は伝わっていなかったと判断できる。これらのことから、アントネリに対して規模縮小を求める指令が宮廷から伝わったのはメデイスとの1611年4月11-12日付けの計画案が作成された後であったと考えることができる。

37) 注32と同じ資料の fol.187. なお注33で述べたようにメデイスとの共同案に対して国王が兵数の点から規模縮小を命じたことが記録されている。

38) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4002, fol.85-87, Copia de parecer de Jerónimo de Soto acerca de la traza hecha por Antonelli, 14 de julio de 1612. 前掲書 Abdelatif Elboudjay, p.111. 同書にはスペインからララチェまで短期間で援軍を輸送できるため同地の要塞化は完全にする必要はないとする別の考えが紹介されている。

39) 砲台室は稜堡の付け根に築かれる大砲を設置する部屋で、耳部は砲台室を保護するため、稜堡側面が突出した部分のことである。

40) ララチェ要塞化の議論の経過をまとめた宮廷の記録には両工兵の1611年4月11-12日の共同案を国王は承認し、建設指示書も作成されたが、その後、規模を縮小するように命じたと記されている。撤回された上記承認を明文化した decreto 等

や指示書は本研究で用いた資料には収録されていなかったが、全体の経緯から判断しても、それは一時的な承認であったと考えることができる。注24と同じ資料の fol.93. A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4014, fol.114, Copia de consulta del Consejo de 23 de septiembre de 1613 sobre la fortificación de Alarache.

41) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4007, fol.97-100, Copia de parecer de D. Juan de Médicis sobre la traza de la fortificación de Alarache, 7 de julio de 1613.

42) 前掲書 Abdelatif Elboudjay の p.111-112 でもメデイスの独自案が分析されている。同書でも星型城塞を基に稜堡が配置されており、旧城壁付近を重視した要塞化であることが指摘されている。

43) 覆道とは盛土の斜面で保護される堀の外縁に沿って築かれる道を意味する。

44) フェリペ2世(在位1556-98)の統治時代の終わりにには最も理想的な形態は、建設費を考慮した場合、正五角形であるとな一般的に認識されるようになっていた。

45) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4009, fol.102-104, Copia de consulta del Consejo de 29 de julio de 1613 sobre la fortificación de Alarache. 注40の n.4014 の fol.113-118.

46) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4015, fol.119-120, Copia de consulta del Consejo de 13 de octubre de 1613 y decreto de Felipe III.

47) 注40で述べたようにメデイスとの1611年4月11-12日の共同案を国王は一旦は承認したとする記録がある。

48) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4029, fol.165, Copia de consulta del Consejo de 12 de julio de 1614 sobre fortificación de Alarache y pareceres de Médicis y Soto.

49) 各々の案の試算はアントネリ案はヘロニモ・デ・ソトが、メデイス案はメデイスが行ったと資料には記されている。注46と同じ資料の fol.119.

50) 注19の n.4034 と同じ資料の fol.175-178.

51) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4035, fol.179-180, Copia de carta de Bautista Antonelli, 12 de abril 1615.

52) 1614年9月13日の建設指示書で定められている石材の壁の寸法は、堀の地点から壁の頂部に位置するコードン(cordon)までの高さが44尺、堀の地点での厚さが22尺、コードンの位置での厚さが15尺となっている。注19の n.4034 と同じ資料の fol.176. 他方、実施案となった1615年5月5日付けの共同案では、高さが40尺、堀の地点での厚さが10尺、コードンの部分で5尺となっており、アントネリが拒否した上記指示書で定められていた壁体寸法は大きくくなっていることが解る。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4037, fol.183-184, Relación de Juan de Médicis y Bautista Antonelli sobre la planta de la fortificación de Alarache, 5 de mayo de 1615.

53) メデイスがララチェに到着した日付は次のアントネリの書簡に記されている。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4038, fol.185, Copia de carta de Bautista Antonelli, 7 de mayo de 1615.

54) 注52の n.4037 と同じ資料。

55) 注32と同じ資料の186-190. A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4041, fol.192-194, Copia de consulta del Consejo de 26 de agosto de 1615.

56) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4042, fol.195, Copia de cédula de 23 de octubre de 1615 determinando la orden del Rey sobre la fortificación de Alarache. Real Cédulaは「勅令」とも訳せるが本稿では「国王決議書」と訳した。DecretoとCédulaはララチェの要塞化の経緯においてはほぼ同義であると考えることができる。

57) A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4046, fol.200-201, Copia de carta del Gobernador de Alarache, Pedro Rodríguez Santisteban, 1 de agosto de 1616.

58) 前掲書 Guillermo Duclos Bautista y Pedro Campos Jara, p.37.

59) 先行研究でも1616年8月1日付けの書簡と共に送付された図面は1612年6月8日付けのアントネリ案に基づいていると指摘されている。前掲書 Abdelatif Elboudjay(1999), p.114.

60) ララチェの指揮官が作成した書簡には、両工兵の共同案は、「疑いなく少ない費用となる」と記されている。この記述は、ソトが修正した1612年6月8日のアントネリ案に基づく国王決定案を実施しなかったことを説明した後に続いているため、ソトが修正した上記アントネリ案と比較した場合における、共同案に対する説明と判断できる。A.G.M.M., C.A., Tomo XXXI, n.4036, fol.182, Copia de carta del Maestre de Campo Pedro Rodríguez de Santisteban, 5 de mayo de 1615.

61) アントネリの書簡を含め、ララチェから宮廷に送付された書簡には、現地で実際に建設された各種の軍事施設の建物に関する記述は極めて少なくなっている。また先行研究ではアントネリの区画整備の設計は地形の高低差も考慮されているとも指摘されている。前掲書 Abdelatif Elboudjay, p.110.

62) 前掲書 Tomás García Figueras y Carlos Rodríguez Joulí の p.353 には17世紀末のララチェの拠点内部の各施設の配置を表した復元図が掲載されている。なお同図は1688年に作成された図版を基にして作図されたと思われる。また前掲書 Guillermo Duclos Bautista y Pedro Campos Jara の p.65 と前掲書 Abdelatif Elboudjay の p.115-116 にも施設の説明がなされているが、双方とも区画整備が実施されなかった要因は分析していない。

63) 前掲書 Guillermo Duclos Bautista y Pedro Campos Jara, p.65.

64) スペイン統治下のララチェの駐屯軍および非戦闘員の人数に関しては注33を参照。

65) 前掲書 Tomás García Figueras y Carlos Rodríguez Joulí, p.349.

66) フェリペ3世の政府では1604年から1617年までの期間、政府内に複数の評議会(junta)が創設され、軍事費を縮小する協議が繰り返されていた。トンプソンに従えば軍事費に含まれる要塞化事業の支出も1606年には100,000デクトから50,000デクトに削減されている。I.A.A. Thompson, “War and Government in Habsburg Spain 1560-1620”, The Athlone Press, University of London, 1976, p.89-90.

67) 17世紀初頭、財政難によって各地の要塞化事業が停滞していたことは幾らかの先行研究によって既に指摘されている。それらの例として前掲書 Concepción Porras Gil を挙げることができる。なおフェリペ3世のスペイン政府の政策と同時代の要塞化事業の関連性を詳細に分析した研究は未だなされていない。

68) 図7は前掲書 Antonio Bravo Nieto の p.86 から引用した。同書に従えば図7の中のJ, N, P, R, S, T, V は18世紀に建設された施設で、その他はそれ以前の時代に建設された施設から形成された区画である。

69) 前掲書 Antonio Bravo Nieto, p.85-86.

(2007年3月14日原稿受理、2007年10月1日採用決定)